

医学部長の大脇哲洋です。

鹿児島大学医学科4年生の皆さん。

臨床実習生（医学）の資格修得、おめでとうございます。

あなた方は、医師法改正後、公的化された共用試験 CBT  
及び OSCE に合格した、最初の臨床実習生となります。

昨年度までは Student Doctor と呼ばれていましたが、今年度より、臨床実習生（医学）と呼ぶことになっています。皆さんの認識通り、いわゆる医師の仮免許のようなものです。これから路上に出て運転する、すなわち、臨床の現場で診療する事が出来る資格を取った と言うことです。

臨床実習生（医学）の制度は、国民が、ある程度のレベルに達したと CBT や OSCE で確認された医学生に、安心して身を委ねる事が出来る事を保障するための制度でもあります。

1月から、主治医グループの一人として、外来・入院患者を診る事になります。診察し、診断し、治療を行い、その経過を見ていく、一連の医師としての作業を行うことになるのです。そこには大きな責任が伴います。その医療現場を間近で体験出来ることになります。

鹿児島大学医学部の源流である、西洋医学校 鹿児島医学校の医学校長兼病院長は、このホールの名前でもある、ウイリアム・ウイリスです。かれは、疾病の治療だけでなく、予防医療、公衆衛生、栄養学の重要性を教え、更に薩摩藩に、医学校は地方に附属病院を持つことが重要であり、無医村対策、地方で医師が活躍できる体制作りの提案をしています。こうした姿勢は、彼の一番弟子とも言える、慈恵医大の創立者、高木兼寛の「病気を見ずして、病人を診よ」という、医療の本質に、そして鹿児島大学のミッションに、繋がっていると思います。彼はイギリス独特の臨床実証医学 を重んじ、ベッドサイドテーピングを頻繁に行った と記録されています。鹿児島大学医学部と病院はその流れを汲んでいるのです。人を相手とする臨床は、極めて複雑で奥深いものです。色々な人がいますし、多様な考えを持った人がいます。こうしたことを背景に、様々な問題が発生しますが、同じ志を持つ仲間たち、先輩達と連携し合い、お互いに支えあいながら前進してください。

COVID-19 の感染拡大が、入学時から大学生活を直撃し、あなた方は、対面での入学式も無く、入学後もオン

ライン講義や部活動が事実上出来ないなど、コミュニケーションを取りにくい生活を3年以上続けなければならなかった学年です。この臨床実習期間に挽回するべく、大いに同級生や先輩医師と交流していただきたいと思っています。

日本の医療は、少子高齢化、それに伴う医療費の増大、医師の地域偏在・診療科偏在、人手不足など様々な問題を抱えています。どれ一つをとっても、容易に解決できることではなく、常に自身を変化させていかなければ生き残れません。生涯に渡る不断の努力が求められます。常に自分を磨き、自己研鑽を積める医療者が、国民に求められます。

一方で、あなたたちは、臨床医だけになるわけではありません。研究医、医系技官、世界の保健機関で働くなど、様々な仕事に就くことが出来ます。そうした仕事であっても、臨床の現場に真摯に取り組むことで、医学・医療・生命科学を深く知る事が出来るでしょう。

この臨床実習生(医学)は、社会人の仮免許でもあります。学生から社会人へと踏み出す一歩として、情熱と使命感を持って、進んで行ってください。

私の座右の銘は、「No limit!」です。自分に限界を作らず、将来、素晴らしい医療者、研究者、医系技官などになることを、心から期待しています。今日は、誠におめでとうございます。

令和5年12月22日

鹿児島大学医学部長 大脇哲洋